

日本シェリング協会第 34 回大会 要旨集

2025 年 7 月 12－13 日 早稲田大学

I 一般研究発表

一般研究発表 1

「グラント以後のカント『判断力批判』再解釈——その自然哲学的意義に着目して——」

葛西李成（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程・哲学）

司会：中島新

二十一世紀の哲学的潮流である思弁的實在論において、イマヌエル・カントは一貫して乗り越えられるべき対象として批判されてきた。なかでも、この潮流の初期の立役者でもあるイアン・ハミルトン・グラントは、『シェリング以降の自然哲学』にて立ち入ったカント批判を展開している。グラントによれば、カントが立脚する二世界論的枠組みは、哲学の対象を主観との相関にある限りでの自然に限定することで、〈無制約的なもの〉としての自然の追求を不可能にしているのだ。

しかしグラントの批判は、カントを過度に二世界論的に解釈している。感性界の現象と超感性界の物自体が別の側面から見られた限りでの同じものであることはすでに『純粹理性批判』でも触れられており、二世界論を構成する二区分がいかに繋がるという問いはカントの体系において一貫して論じられてきた。この問題意識を踏まえ本発表は、『判断力批判』における「質料／形式」「無機的自然／有機的自然」の重なり合いを考察することで、その現代的意義を明らかにする。

『判断力批判』序論では、自然の領域としての感性界と自由の領域としての超感性界の間の「裂け目」が指摘されたうえで、この両者の「移行」の問題が提示される。既存の多くの解釈は第二部「目的論的判断力の批判」の「超感性的基体」にその可能性を見出す。しかし、グラントをはじめとするいくつかの研究が指摘するように「超感性的基体」による解決はその形而上学的・神学的な印象を拭い去ることが出来ず、自然の人間化に過ぎないという批判に持ち堪えることが出来ない。本稿はこのような解決が不十分であることを指摘し、第一部「美感的判断力の批判」に目を向ける。

本発表は、「美感的判断力の批判」に以下のことが見出せると指摘する。まず、「目的論的判断力の批判」が有機論的自然と無機論的自然を区分する一方、「美感的判断力の批判」では双方の自然が「合目的性の形式」から思考されている。そして、この合目的性自体はあくまで人間の主観的判断の原理に過ぎないものであるが、しかしそれを喚起する形式そのものは人間と非相関的に存在するとされている。また、第一部にて断片的に見られるエーテル論から影響された記述は、無機的自然の内部での形式性の自己産出を示唆している。これらの指摘を通じ、本発表は『判断力批判』のうちに「形式／質料」「有機的自然／無機的自然」などの二世界論的枠組みを乗り越えうる可能性があることを主張する。

一般研究発表 2

「Fr. シュレーゲル「研究－論文」における近代悲劇論」

橋本悠介（京都大学大学院 思想文化学専攻修士課程・美学）

司会：松岡健一郎

本発表の目的は、フリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）の初期論稿「ギリシア文芸の研究について」（1795、以下「研究－論文」と略記）の読解を通じて、彼の近代文芸史構想において近代悲劇が果たす役割を明らかにすることにある。

「研究－論文」はドレスデン期シュレーゲル（1794-1796）の主要論稿である。この論稿でシュレーゲルは歴史上の文芸活動や文学作品を「自由と自然の交替作用」という原理に基づき、人間の自由な活動と自然との相互規定の所産として統一的に把握する。その際、古代の文芸が自然や生の調和的統一の所産として規定される一方で、近代の文芸は人間の自由な活動の所産として規定される。こうした規定のあり方に則して、古代が循環的な歴史行程（「自然的形成」）として、近代が無限進展的な歴史行程（「人為的形成」）として解される。こうした歴史把握に基づき、一見無秩序に映る近代文芸の現状を近代の歴史的目標である「美的革命」との連関のうちで捉え直すことにより、近代文芸の歴史に客観的法則を与えること。これが「研究－論文」の構想である。

シュレーゲルのこうした構想において注目すべきは、悲劇の位置づけである。古代においてソフォクレスの悲劇が古代の文芸の最高の調和、最高の統一として評価されるのに対して、近代においてシェイクスピアの悲劇は対立を含んだ「哲学的悲劇」として理解される。だが、「研究－論文」においてシェイクスピアの悲劇は単に否定的な評価を与えられるだけではない。近代の歴史全体という視点で見れば、「美的革命」という近代文芸の目標のために必要不可欠な契機として肯定的に解される。それどころか、シュレーゲルにとってシェイクスピアは「近代文芸の頂点」とさえ評される。

こうしたシェイクスピアの悲劇に対するシュレーゲルの両義的な評価をどのように解釈すべきだろうか。この問いに解答することが本発表の目的である。その際、注目するのが *ästhetisch* という語である。

「研究－論文」において、少なくともシュレーゲルはこの語に二つの意味を込めている。それは、第一に悟性と対比され用いられる「感性的」という意味であり、第二に理想的状態を示す「美的」という意味である。シュレーゲルはこれら二つの意味を時には明確に使い分け、時には重ね合わせることで、近代悲劇の両義的な側面を描き出そうとする。

本発表は「研究－論文」において多義的に用いられる *ästhetisch* という語の解釈を通じて、シュレーゲルの近代文芸史上における悲劇の役割を明示することを目指す。

一般研究発表 3

「ポテンツは何故、神々になるのか—シェリング自然哲学と神話の哲学の関係から観る人間の本質—」

吉田一生（国際基督教大学）

司会：諸岡道比古

シュルツによって、シェリング後期哲学がドイツ観念論の完成 (Vollendung) と位置づけられた所以は、一面でそれは非理性的なものを概念的に把握できるという理性主義の徹底でありながら、他面でそれは理性が自らの根拠を問うという理性の自己批判でもあったからであると総括できる。そして、後期シェリングの独自性は後者にあり、理性が導出できない現実を担保しているのは神話の哲学であった。存在、自然、宗教をリアルなものとして求めるシェリングの姿勢は初期哲学から変わっていない。

本発表では、自然哲学に由来するシェリングのポテンツ論を手掛かりに、自然の過程及び人間の意識を構成するポテンツが何故、神々になったのかに注目することによって、人間の本質とは神を定立するものであるとする彼の主張の意味を明らかにしたい。¹発表ではまず、人間が観念的原理と実在的原理、或いは存在可能性 (Potenz) と活動 (Aktus) の二つのポテンツの統一であることを、動力的自然哲学を概観することによって示す。次に、統一を含めた三つのポテンツが、人間によって神の存在の外に定立された世俗的・物質的・盲目的存在を克服するために、自然的宗教と呼ばれる神話を構成することを議論する。ポテンツが神々になるのは、それが既に自然の過程によって意識に到達していること、そして、人間に働きかけるためには人格になる必要があることから説明されうる。また、ポテンツは理性と同義であるが、それは正に神の存在可能性であり、神は自らの意志のみによって全てのものになることができる。

神々と出会った人間にはどのような変化が起こるのか？神話の最終段階において神話は現実世界を肯定する。そして人類の救済は啓示によって決定的なものとなる。この変革をシェリング哲学の影響を強く受けたティリッヒは「新しい存在」と呼んだ。²理性の最も現実的な在り方が人間である。その現実の境界は有限性であり、個性性であり、日常性であるのだが、それらの境界規定は自己規定ではなく、既に神或いは超越的存在に媒介されていること、つまり、私が今ここにあることは神の恩寵以外の何物にもよらないこと、この認識こそが観念論最期の遺産であり、現代の哲学が、尚も形而上学を志向するのであれば、真剣に向き合わなければならないメッセージだと私は考える。

¹ S. Schelling, *Historisch-kritische Einleitung in die Philosophie der Mythologie*, SW XI, S. 185.

² Tillich, *Systematische Theologie*, Bd. I. Frankfurt am Main: Evangelisches Verlagswerk, 1983, S. 162.

一般研究発表 4

「移行と帰還ーフリードリヒ・シラーの『人間の美的教育についてー一連の書簡ー』における遊戯衝動と美的状態ー」

田口博子（白百合女子大学）

司会：中村美智太郎

「[……] 人間はその言葉の十全な意味において人間である場合のみ、遊ぶことができます。そして、「遊んでいるときにこそ、人間は全き人間なのです」。この章句で有名な『人間の美的教育についてー一連の書簡ー』（以下では『美的教育書簡』と略す）は、フリードリヒ・シラーの美学理論の中で最も知られたものであろう。この著作は、1793 年から翌年にかけてデンマーク王子アウグステンブルク公に宛てられた書簡を基盤として、後に雑誌『ホーレン』に発表された。

『美的教育書簡』においてはフランス革命についての評価が下され、その底流にあるのは革命が依拠した啓蒙思想への批判である。自由や進歩への希望が打ち砕かれ、人間は自然からの乖離、自己疎外、社会の分断に苛まれる。さらに、同時代人たちの大多数の性格は粗野な、あるいは無気力の両極に分かれる。前者は市民的な秩序を逸脱し、欲求を満足させることに専心し、文明化された後者は弛緩と倒錯の餌食に陥ってしまった。

このような状況から人間を救い出し、「真の自由」を政治的基盤に置く可能性を現行の国家制度には見出すことはできない。政治的な改善を図るには、共同体を構成する個々人の性格を「高貴にする」、すなわち人間性を形成することが必要であるとシラーは主張する。その目的を実現させる「道具」が芸術である。

現在の世界に特徴的なこの症候に対して美的陶冶はどのような処方箋になり得るのであろうか。美と人間本性についてシラーは、歴史から得られた経験的な定義ではなく、カントの超越論的方法を援用して、「超越論的な方法」によって分析を始める。

『美的教育書簡』は芸術理論のみならず、文学、哲学、教育学や政治理論等に多大な影響を与えてきたが、さまざまな角度からの批判もなされている。とりわけ、「自然的状態」から「道徳的状态」に至るには、「美的状態」を経なければならない。人間性の発展におけるこの三段階説にかんして、美的状態は道徳的状态へのたんなる移行過程、すなわち手段なのか、それとも第 27 書簡で詳説される「美的国家」のように、法律に支配される道徳的国家よりも上位に置かれ得る最終目的なのか。著作内でのこの矛盾はしばしば指摘されるところである。

今回の考察では、美的状態は道徳的状态への通過段階のみならず、道徳的状态からも帰還できる独特な位置を有する状態であることを証したい。そのために、まず人間本性の有する二つの衝動「感性的衝動」と「形式衝動」、双方の衝動が同時に実現化する働きである「遊戯衝動」が展開される遊戯論の部分进行分析する。遊戯衝動が働くとき、人間は美と遊ぶ。次に、「美的状態」あるいは「中間状態」の独自性を通して帰還することができる意味を明確にしたい。

一般研究発表 5

『超越論的観念論の体系』における観念論と実在論の調停

小原優吉（東京大学特任研究員・哲学/倫理学）

司会：深谷太清

本発表では、1800 年の『超越論的観念論の体系』に焦点を絞り、シェリングが提示する超越論的観念論のうちで観念論と実在論の相剋がどのように解決されているかを明らかにする。こうした観念論と実在論の相剋という問題は、カント批判哲学の衝撃以来、常にドイツ観念論ないしはドイツ古典哲学の基調を形作ってきたものである。カントは可能的経験という領域に錨を下ろすことで合理論的な形而上学と経験論的な形而上学の間アンチノミーを解決した他方、その議論はさらに高次で同種の抗争を生み出すこととなった。ここでは新たに超越論的な次元で、自我が第一のものであるか、あるいは物自体が第一のものであるのかが問われることとなる。こうした問題構成においてとりわけ着目すべきは、フィヒテの『全知識学の基礎』「理論部門」における「観念＝実在論」についての議論であろう。同箇所では、自我による自己定立と同じ自我による非我の反定立との総合を通じて、低次の観念論と低次の実在論との橋渡しが試みられる。本発表では、このようなフィヒテの試みを念頭に置きつつ、シェリングの超越論哲学のうちではどのような仕方で観念論と実在論の相剋が調停されることになるのかということを確認化することとしたい。

行論は以下である。第一節では、『超越論的観念論の体系』の読解に先立ち、「独断主義と批判主義に関する哲学的書簡」（1795-6 年）をはじめとするそれ以前のテキストから、当時の哲学的状況における主体と客体の相剋という主題に関わるシェリングの問題構成を確認しておきたい。その上で第二節からは『超越論的観念論の体系』の内在的読解へと移る。第二節では、主に同書第一章から第三章冒頭までを扱い、シェリングの超越論哲学がどのような企図であるかを明瞭に再構成しておく。本発表では特に、シェリングの超越論哲学が——フィヒテに比して——徹頭徹尾「自己意識の歴史」として提示されていることに着目し、そこにおける自我の実在的活動性と観念的活動性の関係を整理しておきたい。ついで第三節では、同書第三章第二節以降から始まる（「自己意識の歴史」の叙述をつぶさにみていくこととする。ここでは特にこの「歴史」の理論哲学的部門において（「唯物論」や「経験論」、「実在論」が言及されていることに着目し、これらがいかにシェリングの提示する観念論に取り込まれることになるのかということを確認する。

以上のように、本発表はシェリングの超越論哲学における観念論と実在論との相剋、あるいは主体と客体の相剋をめぐる議論の再構成を試みるものである。ここで一点、次のことを注意しておかななくてはならないだろう。それは、同時期のシェリングは超越論哲学と自然哲学の（「並行論」を構想していたということであり、それゆえ超越論哲学に的を絞るだけではシェリングによる上記問題の解決は十全には明らかにしないということである。しかしながら、本発表ではフィヒテの試みとの異同が見て取りやすい超越論哲学に着目せざるを得ず、また自然哲学をめぐるシェリングの構想は私の手に余るため、この点諸賢からの活発なご意見を賜りたい。

III 公開講演

「シェリングと 19 世紀ロシア文化―愛智会とチュッチェフを中心に」

坂庭淳史(早稲田大学)

司会：武田利勝

フリードリヒ・シェリングの哲学は、19 世紀ロシア思想・文学の形成に大きな影響を与えてきた。今回はロシア最初の哲学サークル「愛智会」と詩人フョードル・チュッチェフの著作を紹介しながら、ロシア思想・文学の中核にシェリング哲学が入り込んでいることを示していく。

1823 年にモスクワ大学の文学サークルから出発した「愛智会」は、デカブリストの乱（1825）の影響により正式な活動はわずか 2 年ほどで終了したが、メンバーたちは、その後さまざまに分化するロシア思想において、それぞれが牽引役を担っていく。まさしく近代ロシア思想の萌芽とも言える「愛智会」だが、若いメンバーたちを最も引き付けたのがシェリング（芸術哲学、自然哲学など）であった。チュッチェフは、プーシキン、レールモントフに次ぐロシア詩人であり、ロシア象徴主義詩人の先駆的存在とも言われる。モスクワ大学卒業後すぐにロシア大使館員としてミュンヘンへ赴任したため、同世代の友人たちの「愛智会」の活動には参加しなかった。ミュンヘンでシェリングやハイネと交友を結んでいた彼の記す哲学的な詩は、ロシアでは「ドイツ的」とも捉えられた。

「愛智会」がシェリング哲学から獲たもの、あるいはチュッチェフの詩とシェリング哲学の共鳴について、会場の皆さまとともに考えてみたい。

III シンポジウム

「シェリング自然哲学再考」

司会：橋本崇

1. 「後期シェリングにとって自然哲学とは何であったか」

中島新（ボン大学哲学科博士課程・哲学）

現代において「シェリング自然哲学」を再考するさいに、I・H・グラントのシェリング研究はすでにひとつの大きな参照点となっている。その特徴のひとつは、シェリング哲学全体を徹頭徹尾「自然哲学」として理解することにある。一般に、「自然哲学」はシェリングの初期思想を特徴づけるものと考えられてきたが、グラントはそれを拡張し、続く同一哲学期、中期思想ばかりか、いわゆる「消極哲学」と「積極哲学」の二分法が主軸をなす後期シェリングにまで通底する「深部静脈(deep vein)」と捉えている。しかし後期シェリングの思想、とりわけ「積極哲学」までも自然哲学へと還元してしまうことについては、S・ミグラーから批判が向けられた。

確かに『近世哲学史講義』でのシェリングの言によれば、自然哲学は「純粹に消極的な哲学」(SW X, 125)に留まる。この点で、ミグラーによるグラント批判は一定の説得力を持つ。しかしながら、(ミグラー自身も言うように)問題の本質は、「消極哲学」と「積極哲学」という二分法を経てなお「自然哲学」がどのような意義をもつのか、あるいは後期シェリング思想のいかなる叙述が「自然哲学」と呼びうるのか、ということにある。本報告のタイトルを「後期シェリングにとって自然哲学とは何であったか」としたのは、こうした問題意識に基づいてのことである。

本報告では、主に1830年代以降のシェリングのテキストにあたりつつ、後期シェリングの思想における「自然哲学」観の再構成を試みる。そこでは個々の興味深い論点（例えばアリストテレス・カント受容と批判）だけではなく、シェリング研究における主要問題のいくつかにも触れることにはなるが、それに特定の解答を与えることを目的とはせず、これら問題群の整理を行うことで、さらなる「再考」のための一助としたい。

2. 「非生命---質料とアイデアを媒介するもの」

浅沼光樹（立命館大学）

本発表ではイアン・ハミルトン・グラントの『シェリング以後の自然哲学』の第七章、つまり最終章の中盤付近に登場する一つの命題を取り上げる。その命題は次のようなものである。つまり「以上の議論が裏づけられるならば、私たちは驚くべき結論に達している。それは、何ものも消去しない観念論だけが質料ないし物質の哲学でありうる、というものである」（訳書412頁）。

「以上の議論」という言葉は二様に解することができる。第一に、さしあたりそれは直前の議論を指していると考えられる。直前の議論とは、シェリングとドゥルーズの関係をめぐる考察であり、第七章はほとんどこの考察に費されていると言っても過言ではない。しかし第七章が「結論---超越論的地質学」と題されていることを考慮に入れるなら、「以上の議論」とは第二に、ここまでに至る本書の議論全体を指し

ていることになろう。

もちろんこれは別々のことではない。つまり、この命題は、直前の議論の結論というだけにとどまらず、本書全体の結論としても語られている。しかしこのことは、第七章の議論が上記の命題（結論）へと至るための最後の関門だ、ということでもある。この関門を突破しなければ、私たちは上記の命題へと、つまり本書全体の結論へと到達することはできない。この最後の試練を通して、実在的なものと観念的なものの絶対的同一性というシェリングの思想に対するグラントの最終的理解が表明されるのである。

したがってまずはドゥルーズとシェリングの関係をめぐる議論へと向かい、この関門を突破しなければならない。これが本発表の第一の課題となる。しかしその上で上記の命題を本書全体の結論として捉え、その意味を理解しなければならない。これが本発表の第二の課題となる。その際、私は「非生命」という概念を導入する。シェリングどころか、グラントやドゥルーズもこのような概念を用いていない。しかしこれによって私は、グラントのシェリング主義が「存在の大いなる連鎖」という古き良き生氣論とどこが違うのか、ということ、同時に、現代における「自然哲学への移行」がどのような方向に進むべきなのか、ということが暗示されるのではないかと考える。

3. 「ドゥルーズからみたシェリング」

檜垣立哉（専修大学）

近年のグラントの論考に触発されて、ドイツ観念論研究者がさまざまにドゥルーズに関心を表明していることは、フランス側の研究者としても大変啓発されることである。他方で、そもそもベルクソン、ジェンケレヴィッチ、メルロ＝ポンティなどフランスの自然哲学系の論者は以前よりシェリングにかなりの注意をはらっている。シェリングはフランス現代哲学史のなかで見失われた存在ではなく、とりわけその自然という発想は、後期メルロ＝ポンティなどにみうけられるように、重要なテーマであった。

本来であればこうしたフランスにおけるシェリング受容を総覧したうえで、ドゥルーズの側からみたシェリングについて論じるべきかもしれないが、それをすべておこなうのは正直に手に余る。今回は上述の流れをまず念頭におきつつ、グラントの論考を前提としながらも、そこから少し距離をとり、そもそもドゥルーズがいかに関心を持っているか、『差異と反復』のみならず比較的広範囲においてもシェリングに言及する場面を取りあげ、ドゥルーズがシェリングに「見たかったもの」とは何かを考えてみたい。それはドゥルーズ自身のベルクソンやメルロ＝ポンティとの関係を考えるときの一助にもなると考える。